

保健体育科の主張

勝野由志雄

1 教科で育みたい人間像

保健体育科では、「心や体と対話できる人」を育みたいと考えている。心や体と対話するためには、心と体を一体としてとらえることができる感覚を養うことが必要である。2021年に開催された東京オリンピックでは、日本は過去最多のメダルを獲得し、多くのアスリートの活躍を目にすることができた。重要な場面で力を発揮するためには心の力がかせないものとなってくる。これは、メンタルトレーニングが広く取り入れられ、科学的にも証明されていることから言えることだろう。

精神的に悩んでいると体にも変調が起きたり、体を動かすことで気分が晴れたりする経験は、誰にもあるだろう。けれど、心と体が相互に影響を与え合っていることを、全員が実感しているとはいえないのではないだろうか。だからこそ、心と体を一体としてとらえる感覚を養うことが大切になる。このように心と体を一体としてとらえることができる人は、心と体の状態を整え、バランスをとり、様々なことに挑戦する中で自身の成長を味わいながら人生を豊かなものにしていけるだろう。

心や体と対話できる人は、運動やスポーツが自らの人生を明るく豊かにし、生涯にわたって親しむ価値があると考えていくことができるだろう。そして、その一端を担うことが、運動やスポーツの本来の目的であろう。しかし、現実には、その本来の目的から外れ、過度のトレーニングによる健康被害やバーンアウト（燃え尽き症候群）から運動やスポーツを辞めてしまうといったケースが生まれてしまっている。子どもたちには、心と体を一体としてとらえる感覚を身に付け、これまでとは違った視点に立ち、心と体の状態を正しく把握し、ベストな判断ができるように自らの心や体と対話し続けていくことを願っている。

2 教科で願う子どもの学び

保健体育科で願う子どもの学びは「健康や運動についての見方を増やし、自らの体験と結びつけながら、新たな可能性を見出すこと」ととらえている。子どもたちは、健康や運動に対する様々な事象に対して、「どうしたらよいだろう。」という思いを抱きながら、自ら問いを立て思考と体現を繰り返していく。その中で、新たな視点に立った子どもたちは、事象に対して「なぜ。なんで。」という疑問を抱き、問い直し、これまでの体験と思考を結びつけながら、心と体の状態を見だしていくことができるだろう。このような学びの中で、子どもたちは健康や運動に関する原則や概念を理解し、深めながら体現しようとしていくだろう。

保健分野では、健康に関する問いをもてるような学びを大事にしていきたい。なぜなら、現代において健康に関する問題は多岐にわたり、複雑に絡み合いながら社会情勢とともに変化している。そのためこのような時代を生きる子どもたちにとって、自分の健康課題を解決する能力はますます欠かせないものになっていくからである。保健分野の授業で、子どもたちはこれまで知っていて当たり前だと思っていた事象に対して問い直すことを通して、知っているつもりでも実は上手く説明ができないことに気づいたり、新たな発見をしたりするだろう。そのような授業を進めることで、子どもたちは健康に関する原則や概念を深め、心が体に与える影響についてとらえ直していくだろう。

体育分野では、運動の原則や概念に迫るための問いをもつことが重要であると考え。しかし、従来の体育の授業では、運動の行い方や上達方法、コツといったことに着目して学んできた。そのような学びでは、運動の原則や概念に迫るための問いをもつことは難しく、運動の原則や概念の深まりまで思考することが困難であった。また、技能による差も生まれやすく、子どもたちは運動に親しむ価値を見出すことも困難になっている。本校では、子どもたちが自ら問いを立てることを大切にしていきたい。問いに対し、これまでの経験を基に様々な視点から仮説を立てた子どもたちは、仮説を証明するために必要な条件を整え検証を行い、考察につなげていくと考える。このような過程を通して、問いに対して根拠をもった自分なりの答えに迫っていくことに違いない。そのように運動についての見方が増えることで、運動の原則や概念が深まり、体が心と与える影響についてもとらえ直していけると考えている。

保健体育科では、子どもたちが、健康や安全に関する事象や運動種目を通して原則や概念に迫る学びを積み重ねることによって、これまでなかった新たな見方とこれまでの体験を結びつけ、新たな可能性を見だしていく姿を願っている。そして、そのような経験を重ねた子どもたちは、心と体のつながりを実感することができる人になっていくだろう。

本年度の授業実践と分析

授業実践 1



- 1 題材名 「心ってなんだろう
—自分の経験と心の働きから心の発達について考える—」（第1学年）

2 本題材で願う学び

心とは何かを問い直しながら、心の働きについて考えたり、自らの心の変化を経験や科学的根拠をもとに語り合ったりすることを通して、「心が発達するとはどういうことなのか」を追求し、心に対しての見方が増え、自分の成長に対して新たな可能性を見いだす。

【学習指導要領との関連：(2)心身の機能の発達と心の健康 ア(イ) イ】

3 本題材の実際の流れ

時間	問い	学習内容
1	自分が成長したところってどのよう なところだろう。心って何だろう	【課題設定の場面】 ・自分の体が成長したと 感じる部分について自らに 引き寄せていく。体の発 育、発達のメカニズムに ついて養護教諭から説明 を受ける。
2	心のどのようなことについて考 えたいだろう	【課題設定の場面】 ・心とは何かを考えつつ、 どのようなことを考えたら 自分なりの考えを深めるこ とができる問いになるのか 考えていく。
3・4	問いに対してどのような仮説が成 り立つだろう	【検証方法と検証の場面】 ・心が成長するとはどうい うことなのかという問いに 対して仮説を考え、共有し ていく。 ・共有した仮説に対して、 年齢と経験の視点で検証 してみる。
5	どのようなことが考察できたか共 有をしてみよう	【学級内共有の場面】 ・年齢と心の働きの関係 から検証した結果について 考察をグループでまとめ、 全体で共有していく。
6	経験は心の成長にどのような影響 を与えているのだろう	【学びを深める場面】 ・2つ目の検証として、経 験と心の働きの関係にはど ういうものがあるのかにつ いて考察し、全体で共有 していく。
7	心の成長についてまとめてみよう	【個人で考えを深める場 面】 ・これまで、考察してきた ことについてまとめ、問 いに対しての仮説について 結論を見だしていく。心 が成長することについて、 自分の考えを深めていく。

4 「ありたい自分」を思い描く子どもについて

(1) 「ありたい自分」を思い描く子どもの姿とその場面

本題材では第1時と第2時における【課題の設定の場面】と、第7時の【個人の考えを深める場面】とにおいて、顕著に「ありたい自分」を思い描く姿が見られた。

① 【課題の設定の場面】における子どもの姿

第1時と第2時では、本題材と出会った子どもたちが問いを共有し、心が成長することに関する要素を根拠に自分なりの考えを述べている。この考えは、まだ仮説の段階であるが、検証と考察を通して、心が成長することへの理解を深めていくための追求の方向性を

決める大事なものとなる。そのため問いを共有し、仮説を考えていく時間における子どもたちのあらかれの中に「ありたい自分」を見とることができると考え、追求の記録の記述を中心にまとめることとした。

ア 自分はこの仮説で考えていきたいという姿

第1時では、「自分が成長したと感じるところは何だろう」と問いかけた。子どもたちは「身長が伸びた」「体格がよくなった」「声変わりがおきた」など体の成長に関する意見や「性格が変わった」「精神年齢があがった」「反抗期になった」「親を敬うようになった」などの心の成長に関する意見を交換しながら、成長について考えていた。養護教諭から体が成長する仕組みについての説明を受けた(図1)子どもたちに対して、

心について考えていくことを提案し、「心とは何だろう」と全体に問いかけた。子どもたちは以下のような考えを授業のふり返りの記述(以下、追求の記録)にまとめていた。



図1 養護教諭の講話

追求の記録	ありたい自分
<ul style="list-style-type: none"> • 僕が思う心は、自分の感情や気持ちだと思います。例えば、「楽しい」や「うれしい」と考えるのは脳ですが、感じるのは心なのかと思いました。 • 心とは自分の気持ちの総体だと感じました。心は物理的には存在しないけど気持ちは心であることは事実です。ココロは難しいけど、僕は気持ちをまとめて表現するのが心だと思いました。 	<ul style="list-style-type: none"> • 心について、心とは何かではなく気持ちとして置き換えて考えることで心とはどのようなものであるのかについて迫ろうとしている。
<ul style="list-style-type: none"> • 僕は「心」は感情が現れた時に心に変化があることにヒントがあると思います。嬉しい時は心がドキドキして勝った時には「よっしゃー」と感情が爆発するし、悲しい時にも心臓の動きが速くなるから、「心」は感情と深い関わりがあると思います。 • 心はあると思う。例えば映画とかを見た時に悲しいやおもしろいやうれしいなどの感情は考えずに出てくるし、考えずに自然に涙が出てきたり、表情は変わったりするからそういうものは頭で考えず、心があるからそうなると思う。 	<ul style="list-style-type: none"> • 心の変化を感情が変化していくことと結びつけて考えることで心とはどのようなものであるのかについて迫ろうとしている。
<ul style="list-style-type: none"> • 心というものは、気持ちや脳とは違う人間の本能そのものだと今のところ思っている。だが、心というものは日常でよく変わるものなので考えが変わるたびにこの授業を思い出したい。 	<ul style="list-style-type: none"> • 自分の本能(直感)として心をとらえ、変化するものであるからその変化について考えることで心とはどのようなものかについて迫ろうとしている。
<ul style="list-style-type: none"> • 今回は、「心」について考えました。心っていうのは、思ったこと(気持ち)の変化だと思います。簡単に言うならばそうなります。ただ、考えることと同じかどうかはわかりません。脳は知識、記憶、次の行動を考えているもので、心は感情なので、あいまいだけど違うと思います。 • 心っていうのは、何かしらの事を受けた時に考えたことや心情だと思って、それを考えるために使うものが脳だと思いました。脳っていうのはどっちかっていうと、何かを記憶したり、アウトプット・インプットしたりするもので、自分はどうしたいかとかどんな気持ちかを考えるのが、心なんじゃないかなと思いました。 	<ul style="list-style-type: none"> • 心は気持ちや感情だけでなく、考えることとも関係があり、脳の働きとも関係があると考え、心と脳の働きから心にとはどのようなものかについて迫ろうとしている。

保健体育科授業実践 1

このように子どもたちは、第1時において成長ということをきっかけに自身の体のことから心のことへと意識を向けていった。目に見えず、抽象的な存在である心について考えることは、追求の記録からもわかるように心のとらえ方が様々であるため、多様な「ありたい自分」を思い描く姿を見ることができた。明確な答えがないものだからこそ、子どもたちは既存の知識を用いて自分なりの考えを練り上げることで「このことについて考えるといいのではないか」というように追求の方向性としてありたい自分を思い描くことができていたのではないだろうか。

イ 自分自身の心と対話して、心について理解を深める姿

第2時では、心の変化ということをキーワードに「体の成長」と心を照らし合わせ、心も成長するのだろうかかと全体に問いかけた。すぐに「成長する」という意見と「成長したかはわからないが、変わることはある

と思う」という意見が出てきた。以下は、子どもたちから出た意見である。

授業中の発言（抜粋）
<ul style="list-style-type: none"> • 授業中に手を挙げなくなる。 • 手を挙げないのは、挙げるのがめんどくさくなるからだ。 • めんどくさくなるっていうのも成長しているからじゃないか。 • 行動面は退化しているかもしれないが、気持ちは進化してるかも。 • 進化も退化もどちらも変化しているになるから成長しているってことだろう。 • 思春期によって心が成長するということを聞いた。 • 思春期の時は、心が変化したり、不安定になったりしている。 • 子どもから大人になることが成長だと思う。 • 心にゆとりが出ること。



図2 第2時 問いの共有の板書

子どもたちの中で、「心が変わるのか」それとも「行動が変化（進化・退化）するのは、心が成長しているからなのか」といった疑問が生まれていた。そこで、「心が成長するとはどういうことなのか」を問いにして、追求することを提案した（図2）。第1時では、心について仮説を立てていたが、「心は何かしら変化している」という視点に立つことで、自分自身の感情や気持ち、思考、行動というように考えが広がっていった。また、仮説に関しても、根拠を明確に示せていなかったものが、自分の経験や体験から得たものを根拠にして仮説を立てているようすが伺えた（図3）。以下は、子どもの追求の記録を根拠別に分類した。子どもたちの自分の内側と外側をつなげながら考えようとしている。



図3 仮説を立てているようす

追求の記録	ありたい自分
<ul style="list-style-type: none"> 心の成長は、過ごしている上で成長するものだと思います。なぜなら、感情というものは心から感じるものです。そのため、過ごしていけば、「悲しい」や「うれしい」など様々な感情を得ます。そのため、心は成長していると思いました。どうしたら、感情が豊かになるかそれは、日常を過ごして、その時の気持ちを感じることからだと思います。 	<ul style="list-style-type: none"> 心の成長を感情が豊かになることとしてとらえ、どのようにしたら感情が豊かになるのかという視点から心の成長に迫ろうとしている。
<ul style="list-style-type: none"> 幼いころは、机に足をぶつけたら、しょうがないと思っても、今は、うわっ。だるって思うことがあるので、思考が変わると、感情も変わると思う。 	<ul style="list-style-type: none"> 心の成長を思考が変わることとしてとらえ、思考が変わることで感情も変わっていくことから心の成長に迫ろうとしている。
<ul style="list-style-type: none"> 今日、問いについて話し合っ、僕としては、「心の成長」は「情緒が安定すること」だと思います。小さいころは、すぐに泣いたり、大きな声を出したりしていたけれど、今のように大きくなると、状況を把握し、「空気を読む」ことができると思います。このように、色々な仮説が出てくると思うので、色々な視点から見たいです。 	<ul style="list-style-type: none"> 心の成長を情緒が安定したりことであり、空気が読めたりするなど行動面が変わっていくこととしてとらえながら心の成長に迫ろうとしている。
<ul style="list-style-type: none"> 心が成長するというのは、物事のとらえ方や見方が変わることだと思います。最初の1才～5才ぐらいは「自分は、〇〇っていう考え！」など、感情や心情の種類とかが少ないけど、そこから、色々な人から色々なことを学んで「自分の言葉」とか、感情が増えていくと思いました。 	<ul style="list-style-type: none"> 心の成長を物事のとらえ方や見方が変わることを考え、加齢や人との出会いなどの経験によって変わっていくことから心の成長に迫ろうとしている。
<ul style="list-style-type: none"> 心が成長するということは、こころの倉庫が広がることだと思う。こころの倉庫が広がると、こころで受けとめられる量も増え、頭脳も成立すると思ったから、なので、脳が広がると心も広がると思う。 	<ul style="list-style-type: none"> 脳が広がると心の倉庫が広がっていくとして心の成長について様々な知識を得ていくことから迫ろうとしている。

子どもたちの追求の記録からは、上表右側のような「ありたい自分を思い描く姿」を見とることができた。

この場面で子どもたちは、問いに対しての答えを導き出すために、心が成長することに関する要素を根拠にしながらかの考えを述べていることがわかる。しかし、この場面での考えは問いに対しての答えではなく、まだ曖昧な部分があるためあくまでも仮説の段階であるといえる。このような子どもたちが仮説を考えていく姿は、その事象についての理解を深めたいという「ありたい自分を思い描く姿」であると考えられる。これは、第1時でも述べているように、明確な答えがない事象を前にしたとき、子どもたちは既存の知識を用いて自分なりの考えを練り上げることで追求の方向性をありたい自分として思い描いていることと同様であるととらえている。

このように子どもたちは、問いに対して既存の知識を用いて自分なりの答えを導き出そうと思考を繰り返している。そのような子どもたちの姿は、既存の知識

でははっきりとしない事象と出会うことで生まれている。題材を通して、このような事象と出会うことは、子どもたちがありたい自分を思い描くきっかけになり、学びを深めていく要因となっていると考えられる。

②【個人の考えを深める場面】における子どもの姿 ウ 新たに得た視点から心が成長することを自分ごととしてとらえている姿

「心が成長するとはどういうことなのか」という問いに対して、「年齢を重ねることで心が成長していく」「経験を重ねることで心が成長する」という二つの仮説にそって検証を行ってきた。それらの検証結果をもとに考察をして、全体で共有を行った。本時は、そのまとめの場面である。子どもたちは、「心が成長するために必要なこと」や「心が成長することで変わるもの」などを根拠に心が成長するとはどのようなことなのかについて、自分なりの考えを以下のようにまとめた。

追求の記録	ありたい自分
<ul style="list-style-type: none"> • 心の成長ってというのは、まわりの人の影響やまわりの環境によって変わることだし、年齢を重ねていくことで、積まれる経験によって、成長していくと思いました。また、この学習をするまでに「成長」というのはあまり意識していなかったから、心は自然と成長していくもので、私たちは1日1日、小さな経験からでも少しずつ成長し続けていると思いました。 	<ul style="list-style-type: none"> • 心が成長することと自分の成長とを関連づけて、自分ごととして考えている姿
<ul style="list-style-type: none"> • 心の成長は、生殖型の成長が、関係していると思う。男性ホルモンや、女性ホルモンの分泌によって、心の変化もおこっていると思う。体の変化だけでなく、反抗期や成長期にも大きく関係していると思う。ただ、今のものは、変化について書いたものです。学ぶ事、経験も自分の心の成長になっているのではないかと感じました。 	<ul style="list-style-type: none"> • 心の成長を心だけでなく、体と一体としてとらえ、体の成長との関係から結論を導き出そうとしている
<ul style="list-style-type: none"> • 経験→情意→知的→社会性（行動）という風になっていると思いました。社会性（行動）からまた新しい経験につながると思います。それが積み重なって「自分」ができてくること、自我が芽生えることが心が成長するということになると考えました。 	<ul style="list-style-type: none"> • 心の成長を客観的にとらえ、自分自身がどのように成長しているかを見いだそうとしている
<ul style="list-style-type: none"> • 自分は心が成長することとは感情のコントロールができるようになることで、対応の手段が増え、その場その場で臨機応変に対応し自分にとっても相手にとっても利益になる行動をとることだと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> • 人の行動と心の働きのつながりが強くなっていくことを心の成長としてとらえ、行動の変化を大切にしている
<ul style="list-style-type: none"> • 今回、心の成長は何かということについて話してきました。ぼくは、最初こんな簡単だと思っていました。しかし、ちゃんと考えてみると物体では存在しないものを考えるのは、難しいなと感じました。じゃあ、心の成長は何か、それは、大人のような振る舞いができるかどうかだと考えました。しかし、大人のような振る舞い方はどういうものなのか、それは人によって異なると思います。大人の対応に近づくことで心の成長というものが見えるのだと思いました。 	<ul style="list-style-type: none"> • 大人のような振る舞い方などの行動面が変わってくることから心の成長というものを見いだそうとしている
<ul style="list-style-type: none"> • 経験することで心が成長することを知りました。心が成長したら、行動や精神年齢、考えなども変化します。そこから、情意機能や、知的機能、社会性も成長します。意識していなくても、勝手に経験しています。最初、心はあるかとかを話し合っていたけど、心は確かにあるし、常に成長しています。もっと情意や、知的、社会性を活性化させるには、やっぱり経験が大切です。経験できる場面（やるか悩んでいる時など）は心が成長するチャンスなので、逃がしたくないなと思いました。 	<ul style="list-style-type: none"> • 経験することが心の成長につながっているという考えから、「心が成長するチャンスを逃したくない」「もっと成長させたい」という思いを抱き、新たな可能性を見いだそうとしている
<ul style="list-style-type: none"> • 僕にとっての「心の成長」は、はっきり言い切ることはできないけれど、「心の成長」は「出来事」と「環境」によって左右されるものだと思います。この13年で、数多くの「出来事」を体験し、いろいろな「環境」で過ごしてきて、自分でも少しは「心の成長」はあったと思います。これからもっと成長するかはわからないけれど、たくさんの環境でいろいろなことに挑戦していきたいです。 	<ul style="list-style-type: none"> • 心の成長が出来事と環境に左右されるものであることを見だし、自分の心をよりよいものにするために、挑戦していきたいと願う姿

本題材のまとめとなる場面で子どもたちは、「心が成長するとはどういうことなのか」という問いに対しての答えを導き出していた。これらの追求の記録から、新たに得た視点から心が成長することを自分ごととしてとらえている姿として「ありたい自分」を見とることができた。

これらの「ありたい自分を思い描く姿」を見とることで、子どもたちがどのような視点から心が成長することについて思考し、自分なりの考えをまとめていたかを見とることにもつながっていた。

(2) 授業者の「教科で願う学び」との関連

これまでの保健の授業では、「心を正しく成長させるためにはどうしたらいいだろう」というように具体的な実践方法について考える授業を展開してきた。このような授業では、決まった答えを見つけるような授業展開になり、子どもたちの考える力を高めることにつながりにくいのではないかと考えた。そこで、本題材では、「どうしたらいいだろう」と実践方法を問うのではなく、心が成長するという事象についての概念に思考が向くように「心が成長するとはどういうことなのか」と問うことで子どもたちがありたい自分を思い描きながら願う学びへと向かっていくことを期待して授業実践に取り組んだ。

では、そのような問いをもった子どもたちが、授業の中でどのようなありたい自分を思い描いていたかについては、課題設定の場面と個人で考えを深める場面の二つを取り上げている。

課題設定の場面では、本題材と出会った子どもたちが心について既存の知識や経験をもとに様々な考えや思いを述べていた。この場面において見られたありたい自分というのは、子どもたちの「この題材では、どのようなことを考えていけるだろう」という視点から生まれているのではないだろうかと考えられる。そして、そのような視点から題材をとらえ直したときに「これは、どういうことなのだろう」という素朴な疑問に対して思考を巡らせながら、追求していく道筋を見い

だしているのだろう。そのような子どもたちの姿から、課題を設定する場面では、子どもたちが題材とどのように向き合っているのか、そのあらわれに注目することで、「ありたい自分を思い描く姿」が見えてくるのだ。そのような姿がその後の追求における重要な起点になっていくと考えている。

また、個人の考えを深める場面では、子どもたちは問いに対して立てた仮説がどうであったかを検証し、考察してきたことを根拠に自分なりの考えをまとめている。仮説の段階では、曖昧であった考えが、検証と考察を繰り返す中で、問いに立ち戻ったり、新たな疑問を抱いたりしながら心が成長することについての知識を深めていった。そのような過程を通して、心に対しての見方が増えることで、題材の初めに思い描いていた「ありたい自分」が根拠をもとにしたものへと変化していると考えられる。それは、教科で願う学びである「見方を増やし、自らの体験と結びつけながら、新たな可能性を見いだすこと」に近い考えに変化していると言える。このように、題材の中で「ありたい自分」を思い描く姿の変化を追うことで、子どもたちが題材を通して、どのような学びをしているのかを見ることができた。そして、その学びは、題材を通して教科で願う学びに近いものへとあらわれていくことがわかった。

	ありたい自分	教科で願う学び
第1時	自分はこの仮説で考えていきたい	事象に対して「なぜ。なんで。」という疑問を抱く
第2時	自分自身の心と対話して心についての理解を深める姿	これまでの体験と思考を結びつけながら、心と体の状態を見いだしていく
第7時	新たに得た視点から心が成長することを自分ごととしてとらえている姿	見方を増やし、自らの体験と結びつけながら、新たな可能性を見いだす

保健体育科、学校保健の実践事例は、下記二次元コードからもご覧いただけます。

静岡大学教育実践総合センター紀要（第33巻）

「教科として学ぶ保健授業に係る養護教諭の専門性と役割

—保健指導的な立場からのかかわりを意図して— 小野 生吹・勝野 由志雄 他



本年度の実践における成果と課題

1 教科で育みたい人間像と教科で願う学びについて

(1) 成果

「どうしたらいいだろう」と方法について問うのではなく、「なぜ。なんで。どういうこと。」と事象に対して問うことで、健康や運動に関する原則や概念の理解し、深めようとする姿が見られるようになった。たとえば「バスケットのゲームにおいて、どうしたらフリーを作り、得点チャンスを生み出すことができるのか」という問いを立て、全体で追求をしていると様々な方法を子どもたちは考え出すことができていたが、そもそもなぜフリーになることができるのか、バスケットにおけるフリーとはどういうことなのか、ということの理解が曖昧のままになってしまい、全体で共有をしても考えを伝え合うことに留まっていた。しかし、「フリーになるとはどういうことなのか」というように運動の原則や概念に迫るような問いを立てることで、子どもたちがわかっているようで、実は理解が不十分であったことなどについて振り返る姿を見とることができた。

保健分野の授業において、これまでは個別的事象を確認しながらどのように実践していくのかという保健指導的な授業を行っていた。今年度は、新たな挑戦として心身の発育・発達の単元である心の働きに注目して題材構想を考えた。「心はどのように発達しているのか」その原理や原則について考えることで「心をよりよく発達させるためには〇〇しましょう」と教えていた時よりも、自分自身の心と対話している姿や追求の記録の記述から見とることができた。一つの事象の原則や概念の理解を深めるためには、その事象に関する知識や新たな見方が自然と必要になっていた。そのような追求を進めることで、これまで知っていて当たり前だと思っていた事象に対して、知っているつもりでも実は上手く説明ができないことに気づいたり、新たな発見をしたりすることができた。

(2) 課題

体育分野では題材を考える際、どの種目を行うかというように種目から題材を考えてきた。そのため子どもたちの中には、題材＝種目という認識が強くあり、種目に取り組みながら動きのコツやポイントなどを考えていく活動を通して運動やスポーツのよさを体感してきた。そのような中で、子どもたちは「ありたい自分」を思い描いてきた。しかし、今年度は「なぜ。なんで。どういうこと。」というように種目の中にある動きに着目して問いを立て、仮説を考え、検証・考察を通して自分なりの考えを導き出す活動を中心に運動やスポーツに親しんできた。このように願う学びを大きく変えたため、保健分野では「ありたい自分」が題材を通して教科で願う学びに近づいてきたものの、体育分野では「ありたい自分」が教科で願う学びに近いものを見とることが困難であった。

上記でも述べたように、今年度は育みたい人間像と教科で願う学びを大きく変えている。特に、問いを立て仮説を考え、検証・考察を通して自分の考えや見方を深めていくことを大切にしてきた。しかし、2、3年生においては、これまで積み上げてきた追求との違いに困惑した姿が見られた。これは題材＝種目という視点から、種目をどのように行うかについて考えていたため、運動の行い方や上達方法、コツなどに着目した追求になってしまっていたからである。教科で願う学びにあるように、どうしたら事象の原則や概念の理解を深めることで健康や運動の見方を増やしていくことができるかが課題になると感じた。

「学びの自覚」という視点から子どもたちの追求の姿を振り返ってみたときに、子どもたちの中に学びが積み重ねられていないように感じた。本来であれば、ある事象の原則や概念の理解が深まっていれば、別の事象に出会ったときにこれまでの学びを活かしながら活動に取り組んでいけるはずである。しかし、そのようなつながりや積み重ねを見いだすことができなかった。運動種目を通して原則や概念に迫る学びを積み重ねることによって、これまでなかった新たな見方とこれまでの体験を結びつけ、新たな可能性を見いだしていく姿を願っていたが、子どもたちの中で、何が新しい見方であったのかと自覚する場面が不十分であったのではないかと推測する。何が新しい見方であったのか自覚できるような手だてがあればその手だてにチャレンジしてみたい。

参考文献・参考資料

- ・勝野由志雄 (2022)「球技 ゴール型 3×3 —シュートチャンスを生み出すために—」

『令和3年度 研究紀要 第22号 学びの自覚—「教科で願う学び」を育む授業—』静岡大学教育学部附属静岡中学校。